

【社会科】教科提案

よりよい社会の形成に参画する子ども

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

これからは、市民がこれまで以上に主体的に社会の形成に参画することが求められている。そのためには地域社会と主体的にかかわりをもとうとする子どもを育てることが必要である。そのために、地域社会の様々な問題に気づき、その問題の解決を通して地域の一員としての自覚を育んでいくことが必要となる。よりよい社会の形成に参画する子を育成するためには、自分も社会の一員であるという考えのもと、身の回りの社会的な事象を自分事として捉え、問題解決していく中で、社会とのつながりを実感し「自分はどうかしたいのか、何ができるか」など実生活に活用していかなければならない。しかし、近年の社会科学習は、教室内部に閉じられていて何らかのかたちで地域社会に参画するような実生活・実社会に開かれた学習となっていないものが多いように思われる。地域の社会的な事象を教材に学習を展開している実践は見受けられるが、社会的な事象の教材化を図る有効な手段をとっておらず、調査・見学やまとめの活動が目的化しているために、多くの時間を費やすものの、学習が十分に教科のねらいに迫るようなものになっていないものも見受けられる。

このような現状を踏まえ、社会科の学習を教室内部だけで終わらせるのではなく、地域における様々な課題を教材化し、それらを有効活用することで、子どもたちが学んだことを実生活・実社会に生かすことに重点をおいた社会科学習の在り方を研究していきたいと考える。そして、そのような学習を通して、「よりよい社会の形成に参画する子ども」を育成していきたいと考える。

さて、社会科は様々な社会的な事象を対象として、学習を進めていく教科である。そのため、「教材」や「問題」は子どもたちが社会的な事象や概念を捉えるために媒介とするものであり、それ故にそれらは目の前の子どものものの見方や考え方に合わせて吟味されたり、設定されたりするものである。教材となる社会的な事象と子どもが出合うことで生じる「問題」から学習をスタートさせ、子どもが価値判断、意思決定しながら追究しそのような追究の過程を通して学んだことを実生活・実社会にいかし、活用していく取り組みを目指していきたい。本校研究テーマである「問い続け、学び続ける子どもたち」を社会科に当てはめて考えると、「社会参画を視野に入れながら、主体的に学びを深めていき、社会科のねらいに自ら近づいていける子どもたちのことである」と捉えている。そして、社会科部ではそれを上田薫の「わからないから、わからないへ」という言葉を授業づくりのキーワードの一つとして大切にしたい。個が問い続けていくのはもちろんであるが、同じ問題であっても個によって解釈や解決の仕方は異なる。それ故に問題解決の中でそれぞれの子どもの中で様々なずれが生まれる。個の中での「わからないから、わからないへ」が、学び合い、交流する中で「仲間のわからないから、自分のわからないへ」「仲間のわかったから、自分のわからないへ」と問題意識が醸成されていく子どもたちを育成していきたいと考える。

(2) サブテーマとかがわって

子どもの言葉でつくる授業とは、問題解決に向け三位一体の対話の中で、子ども自身が学び合い子どもたちでつくる授業である。子どもたちでつくる授業というのは決して子ども任せにするという意味ではない。子どもたちでつくる授業、つまり子ども中心主義は、子どもの可能性を信じ子どもに内在する可能性を引き出すものである。だからこそ、子どもの願い、興味関心、意欲を踏まえた上でいかしていけるように教師の出や支援が授業に大きくかかわってくるものでもある。子どもが「問題」を「解決」していくために、教師は幅広く深い教材研究で複線的・重層的に授業を考え、学びの事実をもとに検討し、その中で発問や板書、授業構成についてもきめ細やかに研究を積み重ねていく必要がある。「問題」については子どもの心をゆさぶる活動や体験で感じたこと、資料などから読み取ったことをもとに、予想や追究の見通し、問題に対して追究の必要性を感じ、切実感をもって解決に取り組むような問題意識を醸成したい。しかし、その場合、社会認識として社会科の課題を十分克服できるものとならない場合がある。その点は、子どもにつけたい力を意識した知識の構造化を示すことによって克服していきたい。また「解決」の場面では、様々な側面からとらえた問題は、個人やグループで追究する、問題の予想では、目に見える事実のみでなく、事実の背景にも目を向けるように働きかける、追究の幅を広げ、深まりをもたせるためにも、子どもたちが交流する場を多く設ける、など

を重視した学習過程にするよう意識していきたい。

（３）社会科で育成する資質・能力及び態度

社会科の究極的な目標は、社会生活を営んでいくために必要とされる「公的資質の基礎を養う」ことである。この意味は「社会科の学習を通して、一人の人間として社会に対してどのようにかわり、社会生活の中で自分はどうに生きていくかを考え、社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである」と解釈している。そして、これこそが「よりよい社会の形成に参画する子ども」の姿であると考えている。これは子どもたちに自分なりの「社会認識」を育てることと関連している。したがって社会科学習では「社会にかかわる力」を身につけるようにするために、社会的事象に主体的にかかわらせ「社会認識」、「公正な判断力」を育てていくことが大切なのである。

「よりよい社会の形成に参画する子ども」が備えているであろう「資質・能力及び態度」を、以下の３つとした。

- ① 社会認識【知識・技能】
- ② 公正な判断力（意思決定・価値判断）【思考力・判断力・表現力】
- ③ 社会にかかわる力【学びに向かう力・態度】

１つ目の社会認識とは、社会的事象に主体的にかかわり、確かな事実認識や社会的事象の意味や働きを考え、判断することを通して形成されるものであると考えている。社会認識を育成するためには、子どもたちが身の回りの社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え方は多様であり、それは、既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。社会認識は、社会的事象に対して疑問を抱くことも含め、自分なりに解釈（意味づけ）して考察して太らせていくことができるものでもある。そして、それは個と全体の往還の中で育まれていく。他者の考えと自分の考えを比較・関連・総合することを通して、自分の考えを再構成していく全体学習の中で、一人一人が友だちとかわりながら、自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより、社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができると考える。そして、子どもが社会的事象に対して切実な問題意識をもつことによって、これまで視野になかった事実を視野に位置付けたり、違う見方や考え方との関係において自分の考えを捉えたりしようとする思考が見られる。つまり、子どもが主体的に問題解決学習に取り組むことができれば社会認識を深めていくことができるのである。

２つ目は、社会的事象を一面的に理解することにとどまらず、多面的・多角的にとらえることで公正かつ総合的に判断する力である公正な判断力の育成を重視したい。社会的事象の多くは、立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものである。多面的・多角的にとらえることで、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また、自分の見方や考え方を表現し合い、友だちと比較・交流することによって、考えが相対化され、より公正かつ客観的なものの見方ができるようになる。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで、自分の考えや夢をより広げ自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして、公正な判断力を育てることで“自分にとって”“自分ならば”など、自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し、未来への生き方につなげていくことができると考えている。

最後に、社会にかかわる力とは、学んだことをもとに、実際に社会に働きかけ、社会に参画していく力であると考えている。この力は、実際に社会に働きかけていくことで養われると考えている。社会科の学習で学んだことを生かし、よりよい社会の形成に子ども達なりにかわっていきという体験をさせることで、この力を強化することができると同時に、自分と社会とのつながりを実感し、自分なりに社会の様々な事象にかかわっていかうとする態度も養われると考える。社会にかかわる力はその名の通り社会に働きかけていく実践的な活動のもとでこそ、形成されるものである。



図1 社会科で育成すべき資質・能力の三つの柱

2. 社会科でめざす授業（何を・どのように学ぶか）

（1） 実社会・実生活に開かれたプロジェクト型（提案・参加型）学習

社会科部では、実社会・実生活に開かれた「問題解決学習」の中でプロジェクト型の学習を積極的にデザインしていく。そのような学習をデザインしていく上で以下の3つの学習過程を大事にしていく。

- ① 出会う（社会事象と出会う⇒学習問題を見出す⇒予想や学習計画を考える）
- ② 追究する（問う＋一人で学ぶ＋対話する＋振り返るの連続）
- ③ いかす・つなげる（学習成果を他者に伝える・別の事象に当てはまる別の視点で考える）

これらの学習過程において、学習の対象を何度も見直し、学習問題を作り直していく反復活動によって社会認識を深め、その背後に隠されているものに迫っていく。上記3つの学習過程では習得・活用・探究を往還しながら子どもたちは学びを深めていくだろうと考えている。

それ故にこの3つの学習過程は単線的な学習過程であってはならない。学習の過程で子どもたちの考えが収束、拡散を繰り返し、それぞれの学習過程を往還しながら社会認識を太らせていくことにより、よりよい社会に参画していく子どもが育つと考えている。

① 社会認識育成の学習過程

社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げるため、より具体的・直接的に現代社会とかがわり合う。事象を単に知識として獲得するだけではなく、実社会に存在する「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかがわからせる中で認識される。「子どもたちは、今どのようなことに興味・関心を持ち、追究しようとしているのか」や「この子はこの問題をどのようにとらえどのように向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。そして、追究していく過程を通して社会認識を深化させていくのである。自ら追究する中で獲得していった知識は、単に知識の増加にとどまらず知識を獲得するための筋道や学び方をも体得するはずである。そのために、教師は一人一人の子どもに寄り添いながら、学習意欲やそれぞれの問題意識を高めていく支援が重要となる。

② 公正な判断力育成の学習過程

子どもたちは追究の過程を通じて知識を獲得し、よりよく問題を解決する技能を身につけていく。問題を追究し、解決していく方法を学び、物事を関連付けて捉えることを学ぶ。その中で事象の認識の仕方、社会事象に対し主体的に疑問をもつ力、積極的に調べ必要な情報や知識を選択する力、友だちとのかかわりの中でその知識を深めていく力を身につけていくのである。そうした能力を身に付ける過程において、いろいろな学び方や考え方を知るとともに、価値判断、意思決定していく力も獲得していくのである。

③ 社会にかかわる力育成の学習過程

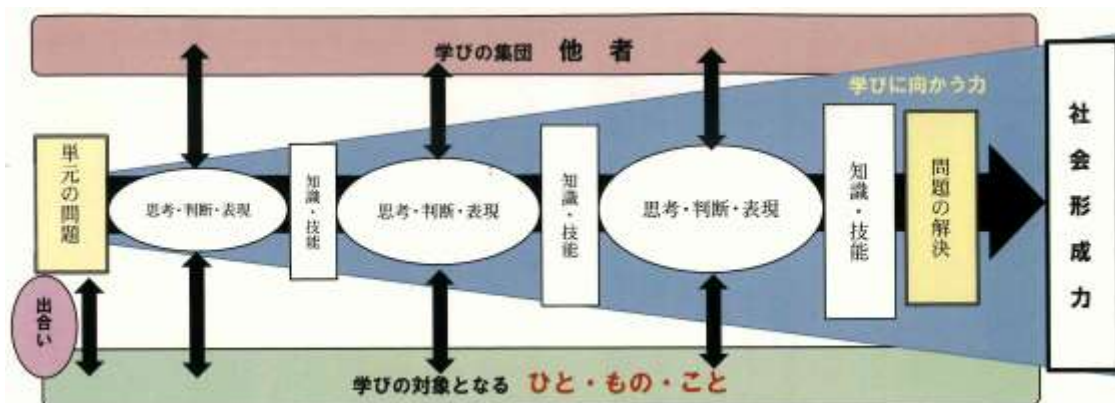
子どもたちの社会にかかわる力を育むには、自分と社会とはつながっており、自分も社会の一員であるという考えのもと、社会的な事象を自分事として捉えることが必要である。そして、そのためには、問題解決学習の改善・充実を図りながら、社会とのつながりを実感し「問題に対して、自分はどうすべきか、何ができるか」など実生活に活用していくこと、即ち社会に参画していくことが必要である。

R・ハートは、子どもの参画を「人の人生や人が暮らすコミュニティの生活に影響を与える意思決定を共有するプロセスである」と定義している。また、コミュニティ参画という地域コミュニティへ子どもを参画させることの重要性を述べ、子ども参画の実践者にとっての指標として、活用される「参画のはしご」モデルを提唱した。「参画のはしご」では、子どもの参画形態を8つに分けて提示している。①あやつり②お飾り、③名目のみ、④大人から役割を与えられ情報を与えられる、⑤大人から相談され情報を与えられる、⑥大人が主導し子どもと共同決定する、⑦子どもが主導し、大人に指導される⑧子どもが主導し大人と共同決定する、である。はしごの上段にいくほど、子どもが主体的にかかわる程度が大きい。参画の形態が子どもの発達や状況に応じている必要性を示した。非参画と言われる①～③は参加していない状態である。④は、子どもの側ははっきりと役割が用意されていて、子どもは参加しているというものである。教師が一方的に主導権を握る企画では子どもたちは本気にならない。ともに学び、話し合い、行動することが大切なのである。しかし、参画をめざすためにもプロセスは必要である。

本校では発達段階の違いはあるが、どの学年においても、④段階を意識して学習を始める。4月の段階では子どもたちは社会に提案、発信するという経験が少ない。そこで学んだことをまとめ、追究する中で表現方法について役割を分担する。ここには大人も大きくかかわる。この経験をもとに、子どもたちから意見が出てきて、発信の仕方にも提案が出てくる。次に⑤⑥を経て実践力を育てていく。⑤は学習にかかわってきた大人に対し意見や提案ができる。しかし、この段階ではまだ最終決定は大人である。④と大きく異なるの

は子ども側から意見が言えるということである。⑥は子どもに問いかけ、話し合い、決めていく。⑥までの活動でも十分社会参画をしていると言えるであろう。⑦は、自分たちで何のためにやるかを自分たちで決めて、自分たちで分担をして活動をする。さらに、⑧は子どもが自分たちでやるだけではなくて、大人を巻き込み活動する段階である。⑦や⑧の子どもの主体的な参画は、地域住民にも大きな影響を与える。しかし、子どもの社会参画とは、子どもたちが企画し、運営する力を育てるために行うものではない。子ども一人一人が社会に対してより強く関心を持ち、社会の一員としての自覚を高めるために有効であると考え。また、子どもたちが社会に働きかけることで地域の人にも社会の一員としての自覚と誇りをもたせることにもつながると考える。

今年度は、目の前の子どもの実態を把握しながら、ハートの参加の発達段階を意識して学習を構想していくが、常に子どもたちが「参画のはしご」の⑧を目指さなければならないということではない。大人が子どもの参画を支援するときに、子どもの選ぶどのレベルでも活動できるようにするための目安であると捉えている。子どもたちの社会にかかわる力を育成するためには、子どもたちが選択し、判断し、決定する場を大事にしながら、子どもの発達段階や能力、状況に応じ臨機応変にさまざまな活動をつくりだせるようにしていきたい。「社会認識」や「公正な判断力」を充実させ「社会にかかわる力」にあたる「提案・参加」を一つの到達点として学習を構想することで、子どもたちが学習の中で、社会に働きかけることで達成感を持ち自己実現を感じることができると考えている。



(2) よりよい社会の形成に参画する子どもを育成する学習の6つの要件

よりよい社会の形成に参画する子どもを育てるために6つの要件が必要だと考えている。

- ① 地域課題の教材化 ② 出会いと学習の見通し ③ 一人学習の充実
④ 協働的な問題解決 ⑤ 振り返りの重視 ⑥ 地域への働きかけ である。

まず、社会参画の教材は、地域教材であるということは第一条件であろう。社会科部では、この要件をもとに、地域に根差し、現実の社会に提案する社会科授業を目指したい。話し合いの成果を自治体、企業、地域に提案・交流するプロセスを組み入れるなどして、学習プロセスを地域に開かれたものにするを大切にしたい。子どもを地域に根付かせ市民としての構えを作っていくことが必要である。また、社会科における社会参画の意味は何か。何をすれば社会参画といえるのかということも考えていきたい。

2. 社会科における「問い続け、学び続ける子ども」(実践例)

「問い続け学び続ける」ということは、習得・活用・探究を往還し、行き来するものである。多様な活動や対話、かかわりの中に開いている動的なものである。それが真の学びのプロセスをうみだす。常にクラス全員に開かれている学習なのである。閉じるということは動的性を失うことになる。教師は、子どもと子ども、子どもと問題などからずれを発見し、子ども同士をつなぎ、学習を動的にみて膨らみをもたせていく。そのプロセスを重視し、わからないことからわからないことにつながるようにするのも教師の役割である。ゆえに、教師の眼は固定化せず、動くものによって動くものをとらえるという考えのもと、常に動的に子どもの学びや教材を追究することが必要である。また、問い続け学び続けるための切り口として角度をつけた地域教材の開発も必要である。地域に学ぶとは、教材との出会いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」との出会いの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることである。地域社会とは子どもたちにとって一番身近な外的環境であり、日常生活と直接結びついている環境である。よって、生活

空間としての地域社会に学ぶことは子どもたちの興味・関心を引きやすく、学習意欲を高めやすい。また地域社会に存在する諸課題を子どもたち自身が自分の問題として理解し、その解決に立ち向かうことを可能にし、それが地域社会の一員としての自覚を喚起し地域を愛する心を育成することにつながる。また、「地域に学ぶ」ことで「ひと・もの・こと」と直接触れ合うことができ、体験的な活動が組み入れやすくなり追究意欲を高めていけるのではないかと考えている。しかし、地域問題の解決を考えるには、地域の中だけで思考し、閉じてしまっていては、解決の広がりは見えなくなる。こうした状況を打開するには、地域の問題を一般化することが必要である。地域教材は地域の問題であると同時に、他の地域や国にもつながる社会問題としての側面がある。地域教材を日本全体や世界の抱える社会問題の一つとして位置づける活動を学習過程に組み込むことにより、子どもたちは地域の問題をより多面的、多角的に理解することができ、一つの立場だけではない見方をすることができるようになると思う。公民的資質はそれだけでは育てることができない。それぞれの事柄、教材に関する理解と愛情、社会的な見方や考え方、問題解決学習、よりよい社会への参画と関連して始めて育てることができるのである。

(3) 6年生「鎌倉時代 元寇」から

問題「文永の役が終わって「どうしよう」っていう時宗様に、参謀として助言をしたいな。みんなならどうする？」（攻撃する・守る・話し合う 3つの立場から）（一部授業記録を抜粋）

のり：私は守る方がよかったんやけど、悩んでるんよ。もし自分たちがその時代の農民として考えてほしいんやけど。例えばみんな博多湾に住んでいて、土地も農地も無茶苦茶にされるやん。嫌やろ？だから、守りと話し合いで迷い中なんよ。自分たちのふるさとをこわされるのはめっちゃ嫌やん？攻撃とか守りとかいう前に、国書を返して、まずは話し合っというたらよかったと思うんよ。

信也：僕も似てて、守りだったんやけど話し合いも考えられることもある。まず国書返した方がいい。それで話し合いが上手くいかけたらそれに乗っかることも考えられる。いろんな使い道が国書で考えられる。国書は返しておいた方がよかったんじゃないかな。

創太：武士っていうても、もともとは農民からなってるやん？本当は戦いたいわけじゃなかったんと違う？だからできるだけ平和になるために話し合う方がいい。平和っていうのはどの時代であっても、命を大切にすることだから、元は聞く耳をもたないかもしれないけど、平和に解決する方が当時の人たちにとってはいいと思う。だから、いつもみたいに立場を変えて劇化して、その時の人の気持ちをみんな考えてほしいと思う

教師：劇化するん？いいの？ C：するする。

りあ：私、劇化の前に言いたい。鎌倉の円覚寺に電話して聞いてみたんだけど。時宗が元の兵士も敵味方なく供養してたんよ。そのお寺の人は「戦いは勧められません。」って言ってた。だから、守りと話し合いは似ているところもあるから、劇化では今までの自分の立場を考えて分かれなくちゃいけない。

ゆみ：劇化なら、側近役だけでなく、決断を迫られていた時宗の気持ちになって考えることも大事やから時宗の気持ちも大事にして時宗になったらいい。

立場を変えて劇化形式のグループ学習へ

のりがみんなに問いかけ、それを受けて信也の考えが変容した。創太は友だちの考えが揺れてきたことを感じ、劇化形式のグループ学習をすることで考えを深めようと提案した。劇化形式で学ぶことで、歴史の傍観者にならずに当事者性を持ち、歴史を引き寄せて考えさせることができる。そして、全体学習の後、自分の立場を変えることで、従来の立場だけでなく、複数の見方ができる。劇化形式のグループ学習後、多くの子どもが友だちの意見を聞き、考えを深めたり変えたりした。このように、他者の意見に触れ自己の考えを更新・変容し学びをデザインする子どもたちの姿が本時の中で見られた。費用、技術面などそれまで話し合っていた内容について、立場を変えることでわかったという意見も多く出た。立場を変えることで客観的に自己をモニターすることができた。また、外交のルールや国書の意義、未曾有の事態での時宗の決断、平和の意味など社会認識の深まりを感じる意見やさらにわからなくなったことについても詳しく説明していた。また単元を見通した子ども学芸員や地域への発信の言葉など、社会参画につながる意見も出た。学校だけでなく現実の社会とのつながりをもったことで、対象・他者との対話をすることができた。出会った多くの方々が、学習を高めてくれる貴重な指導者となり、子どもたちにとって大きなエネルギーとなった。そのことで、地域社会に対する誇りと愛情を持とうとする変容が見られた。

4. 研究の展望

(1) 社会科におけるみとりと支援

社会科における着目児とは単元を見通して設定する。着目児をおき、その子の思考の流れや変化、他の子とのかかわりを追いつけることが大切である。その着目児の思考から問いを設定し変容を見て、目標を達成したか具体的にみることができる。

授業をデザインしていくうえで、着目児なくしてデザインしていくことができない。なぜなら、着目児として単元を通してつけない力をもとに、単元で変容を期待する子や子どもどうしのかかわりなどを視点に、着目児の変容を追いつながら、子どもたちが「ひと・もの・こと」とどうかかわっていくかをみとることができるからである。問題に対して着目児の解決、追究の仕方を見る。つまり着目児の「わからないことから、わからないことへ」の思考をみとることによって、クラス全体の子どもたちが問い続け、学び続けていけるように支援していくことができるのである。問題意識を深化していくためにも、一時間の授業におけるみとりに焦点をあて研究していく。教師は学級全体で問題解決へと近づけていくために子どもの考えを把握する。子どもたちの考えを把握し、整理しながら、どの子の考えをとりあげれば学びが深まるのかといった視点を持ち、子どもたち自ら焦点化する話し合いができるよう個に応じた支援も大切にしていきたい。そのために日々の子どもの様子を記録してためていくカルテ、子どもの考えを記録した作文、授業記録、座席表などで個の学びをみとり、支援していく。座席表には、カルテを通してみとった子どもの変化や様子と作文や授業記録などをもとにした子どもの考えと子ども、そして子どもと課題の関係性を記録していく。このような考えを大切にしながら以下3点を視点にしてみとりと支援を行っていく。

① 子どもの生活とつながる学習問題

子どもたちが興味・関心をもつような活動や、調査見学を取り入れた複線的重層的な単元計画が必要である。また、他の友だちとの学びの交流を考慮した学習問題が大切である。学習問題とは、子どもたちの問題意識からスタートし、“相互の刺激”をしながら中で深化、発展していくものである。学習問題と出合ったとき、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめめる。問題解決への追究の見通しがもてる切実感のある学習問題でなければならない。

② ひとり学習における子どもの変容

問題と積極的にかかわっていくと、ひとり学習の問題意識が深まっていく。指導者にとって一人一人のみとりと支援が特に重要になってくる。ノートや作文、発言から個々の学びをみとり、子どもたちの変容を把握しながら単元構成にいかしていきたいと考えている。個に応じた支援をすることで、子どもたちが調べてきた様々な考えをつなぎ、焦点化しながら全体学習をつくっていく。

③ 子どもの関係性をとらえる

ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習で他者と対話する中で、一人一人の学びの質を高めることができる。日々の授業や生活の様子を座席表などで記録してきたことをもとに子どもの関係性をとらえた上で、対話学習では、ともに学び、練り合う場面を特に大切にしたいと考えている。

(2) 研究仮説

社会認識、公正な判断力、実践力をそれぞれ重点的に育む3つの学習過程を単元の中に位置づけ、①出合い→②ひとり学び→③協働的な学び→④振り返り→⑤いかす・つなげる という問題解決的なプロジェクト型の学習過程において、子どもが「よりよい社会の形成に対する自己のかかわり方」を追究すれば、よりよい社会の形成に参画する子どもが育つだろう。

(3) 研究の評価

自分の思いや考え方の根拠となる資料等を、ひとり学習でみとるとともにその変容を把握する。様々な活動におけるノートや作文等で、個々の学びをみとり評価する。全体学習では、話し合い活動を通して、対話の深まり方を探り、評価する。子ども自身が学習を振り返る作文で、公正かつ総合的に判断する力が育っているかを評価する。単元の導入と終末には作文を書いて、自ら変容を意識し、確かめる。また、学びの足跡を掲示したもので確認したり、個々でファイリングしたりすることで、新たな課題を見つけ、学びを深めている子どもを評価する。そういった評価をもとにしながら、授業分析、子どもの変容や深まりを視点に、成果と課題を考察していきたい。

社会 5年B組	日本の工業とわたしたちの暮らし ～日本一の鉄づくりを目指す製鉄所～	中山 和幸
------------------------------	--	--------------

1. 単元について

本単元は、学習指導要領第5学年の目標（3）に基づいて設定しており、子どもたちは、我が国の工業生産が国民生活を支える重要な役割を果たしていることについて考えていく。その中で、特に重視したいことは「我が国の工業生産に関心をもち、問い続ける態度や能力を育成すること」である。そのためには、子どもたちの追究を自分ごとにする必要があると考える。そこで、本単元では「ふるさと和歌山にある製鉄所の鉄づくり」を教材とし、その現状や課題を追究していく中で、徐々に鉄づくりを子どもたちにとって身近な距離に引き寄せていけるようにしたい。そして、「鉄づくりに関わる大人」の思いや願いに触れたり、学級の仲間と考えを交流したりする中で、ものの見方を広げ、考えを深めることができるようにしたい。

2. 単元設定の理由

（1）本実践の主張点

- 「ふるさと和歌山」の鉄づくりの現場を見たり、働く人々の生の声を聞いたりしながら、鉄づくりの現状や課題について追究することで、工業生産を身近な距離に引き寄せ、「よりよい工業生産のあり方や果たす役割」について問い続ける子が育つだろう。
- よりよい工業生産のあり方や果たす役割について考えたことを地域の人々に発信することを見通したプロジェクト型（提案・参加型）の学習を行うことにより、現実的・客観的・多面的な思考を育てると共に、社会の一員としての自覚を高めることができるだろう。

（2）教科提案とのかかわり

本単元では、社会科部として「よりよい社会の形成に参画する子ども」を育てるために意識している単元構想の6つの要件のうち、①地域課題の教材化、②協働的な問題解決、③地域への働きかけに重点をおいた授業づくりに取り組んでいる。

① 地域課題の教材化 社会的事象にかかわる追究を「人ごと」から「自分ごと」に

本単元で取り上げる製鉄所は、5年生の子どもたちが一度は耳にしたことがある製鉄所である。家族を含め、知り合いがそこで働いているという子どももいる。そのような意味で、学校から物理的に近いというだけでなく、子どもたちにとって、どこか親近感の湧く教材となるだろう。「工業生産」という社会的事象は、子どもたちにとって身近ではなく、多くの子どもたちにとっては「人ごと」である。地域の製鉄所のよさや工夫を知り、課題を知り、問題の解決に向けて学級の仲間と議論を交わす中で、「人ごと」だった工業生産が「自分ごと」になるようにしていきたい。

② 協働的な問題解決 協働的に問題解決に挑む態度の育成と公正な判断力の育成

社会科の究極の目標は「公民的資質の育成」である。公民的資質とは、個人として社会に適応しながら、社会の様々な事象と自分とのかかわりの中で問題を発見したり、人々と力を合わせて問題解決をしたりしながら、よりよい社会の形成に参画する資質であると考えられる。したがって、単元を通して、仲間と議論したり、考察したりする協働的な問題解決の場を大事にしたい。

仲間と協働することは、一人では一面的・主観的になってしまう思考を多面的・客観的にする

ことができる良さがある。仲間と協働して問題解決に挑む場を設け、その中でより多面的・客観的な視野で価値判断したり、意志決定したりできる公正な判断力を育成していきたい。

③ 地域への働きかけ 実社会に働きかける経験が社会の一員としての自覚を育てる

変化に富む現代社会に生きる一人の人間として、子どもたち一人一人に社会の一員としての自覚を育てる必要がある。そのためには、教室内部の閉じられた社会科学習では、不十分であり、自分たちが学習を通じて、思考し、理解したことを地域に発信・提案していくような「地域への働きかけ」を行ってこそ、社会の一員としての自覚をより強く持てるのではないかと考える。

本単元では、単元の終末において、子どもたちがよりよい鉄づくりについて構想したことを地域の人に発信していく。このような活動が子どもたちの経験知となり、社会の一員としての自覚を深めていくことができるのではないかと期待している。

(3) 問い続け、学び続ける子どもたちをめざすために

社会科における「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿とは、子どもたちが社会的事象、社会生活に関わる中で、現状を知り、問題を発見し、問題の解決に向けて、ねばり強く仲間とともに学び続ける姿である。製鉄所の鉄づくりを見学・調査したり、鉄づくりに関わっている人の思いや願いを聞いたりする中で、子どもたちに生まれる疑問や問題の解決に向けて問い続け、学び続ける姿を引き出したい。また、個の考えを全体学習の場で互いに表現し合うことで、考えのずれや新たな問題が明らかとなり、再び問いをもち、学び続ける姿を具現化していきたい。

3. 単元目標

- ・製鉄所の鉄づくりについて調査・見学したり、資料を活用したりすることを通して、質の高い鉄が自分たちの生活の向上や産業の発展に重要な役割を果たしており、それらは鉄づくりに関わる人々の様々な工夫や努力の上に成り立っていることがわかる。(社会認識)
- ・仲間との意見交流を通して、よりよい鉄づくりについて自分なりの考えを持ち、判断することができる。(公正な判断力)
- ・よりよい製鉄所の鉄づくりについて関心をもち、すすんでよりよい鉄づくりを考えたり、考えを表現しようとしたりすることができる。(社会と関わる力)

4. 単元計画 (全 24 時間)

第一次 (出会い) ○日本の工業について知ろう。(④) ○学習問題と学習計画をつくろう。(①) 第二次 (主に社会認識に向かう追究) ○製鉄所の鉄づくりを見学しよう。(③)	○製鉄所の製品や人々の仕事について調べよう。(⑥) 第三次 (主に公正な判断力に向かう追究) ○これからのよりよい工業生産について考えよう。(⑤) 第四次 (主に社会と関わる力に向かう追究) ○学んだことをまとめて地域の人に発信しよう。(⑤)
--	---

5. 本時について

「公正な判断力の育成」を重点にしている場面を取り上げたい。本時までの学習で鉄づくりに携わっている人々の工夫や努力を知った子どもたちがさらに学びを進めていく上で、鉄づくりに携わっている人々が直面している問題があることを知り、その問題について仲間とともに考える場面を本時としたい。大人が現実の社会の中で悩んでいる問題を子どもたちが解決することは容易ではなく、そもそも明確な正解があるものではないだろう。しかし、そのような「答えのない問題」に対して、子どもたちが主体的に調べ、仲間と協働して問題解決を図る姿を引き出したい。

社会科 6年C組	わたしたちの願いと政治のはたらき ～どうする？ 未来のまちづくり～	梶本 久子
-------------	--------------------------------------	-------

1. 単元について

本単元は、学習指導要領第6学年の目標(2)に基づいて設定したものである。中でも、政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることについて考える。6年生にとって、政治の働きや考え方について理解するためには、具体的な事実をもとにして捉えていくことが大切である。身近な「ふるさと和歌山」の現状や課題を追究していく中で当事者意識をもって取り組むことができると考える。そして6年生らしい思いを出し合えるように、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切に、自分の考えをより深められるようにしたい。

2. 単元設定の理由

(1) 本実践の主張点

- ・地域の明日を担う主権者として、未来のまちづくりを考えることにより、当事者意識をもち、和歌山県の現状や課題について、問い続ける子が育つであろう。
- ・「6C和歌山長期総合計画」を行政や地域に発信することを見通した授業デザインを意識させることによって、多面的・発展的な思考を育てることができるであろう。

(2) 教科提案とのかかわり

社会科部では「よりよい社会の形成に参画する子ども」を育てるために、6つの要件が必要だと考えている。中でも、地域課題の教材化・出会いと学習の見通し・地域への働きかけを中心に述べる。

① 地域社会の課題を教材化する～ふるさと和歌山に学び、和歌山を愛する個に～

地域社会の課題で学ぶということは、教材とのかかわりを地域から見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのかかわりの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることである。これからの社会は市民がこれまで以上に主体的に参画することが求められている。そのためには、地域との主体的なかわりをもととする子どもを育てることが必要である。そこで、かかわりの中で見出したよさを実感し、地域との主体的なかわりをもととする子ども、すなわち地域を愛する個を育てたいと考えている。そして、学習内容を効果的に理解させるために、18歳選挙権の啓発活動を行っている学生に生の声を聴き、興味関心を喚起し、本単元をスタートした。また、10年間の期間を終える「和歌山県長期総合計画」を軸に、改変の「今」を大切に「未来のまちづくり」を提案していくことをめざす。

② 出会いと学習の見通し ～プロジェクト型学習を組織する～

子どもたちのおかれている生活に公民をつないで考えることは大切なことである。それだけに、子どもが主体的に学んだことを活用し、意思決定し自分ならどう行動するのかを考える実践にしたい。そのためには一人一人が問題を見つけ、これまでの生活体験や学習、知識・技能を活用する。そして子どもたちが問い続け、追究し続けていくプロセスの中で、新たな視点や社会認識を獲得したり、深めたりしていく。この学びが、生活と公民の学びをつなぐことであり、未来の生きて働く力を養い、それが社会参画力となると考える。

そのためにも、教科内容をふまえ、新たな社会的事象を教材化し、子どもたちが主体的に価値判断をする力がつくような授業デザイン（プロジェクト型学習）をしていかなければならない。今年度は1年を通して「ふるさと和歌山 HAND IN HAND プロジェクト」というプロジェクト型の学習を行う。常に「和歌山」のことを意識しながら、社会科だけにとどまらない横断的な学習で、和歌山から日本の政治について学んでいく。

そして、年間を通し、地域の多くの教材やこだわりをもった方と出合わせ、学んだことを発信していくことで、子どもが社会認識を確かにし、意欲的に追究することができるのではないかと考えている。社会科では立場や考え、価値観の違いの中から多面的な視点がうまれていく。そのために本単元だけでなく、どの単元でも、自分の考えを表出させ、他者との対話や関わりの中から事実認識や価値判断の違いを認識する場を設定している。単元と単元の学びをつなぐためには、複数の単元を貫く「意思決定」「選択」という主題を設定して単元間の学びをつないでいきたい。

③ 地域への働きかけ ～使命感で当事者意識をもたせる～

本単元では、当事者意識をもたせるために、住みよい和歌山県の提案をするということを組みこんでいる。未来の主権者、現在的主権者として、その自己認識を育てることは重要である。そして、住んでいる地域社

会の一員であるという認識をもつことで、子ども目線での「まちづくり」に参加することも可能である。これらは、指導要領の「内容の取扱い」(2)ウの「地域の開発」の事例として位置づけられる。本校と県庁は数百mの距離である。計画に調査活動を位置づけることが容易になり、行政の方々との聞き取り調査を活用して「政治の働きや考え方」の理解を図ることができる。本単元でも地域のひとともに学びを深め、子どもたちが多くの人に伝えたいという思いを大切にしたい。授業中だけで社会認識を定着させるだけでなく、子どもが「使命感」をもって対話やインタビューしていくことにより、それぞれの文脈でストーリーを主体的につくっていくであろう。現実の公的社会問題に直面するような場面で転移できる学力にするためにも、当事者性をもたせる仕掛けが必要であると考えている。

(3) 問い続け、学び続ける子どもたちをめざすために

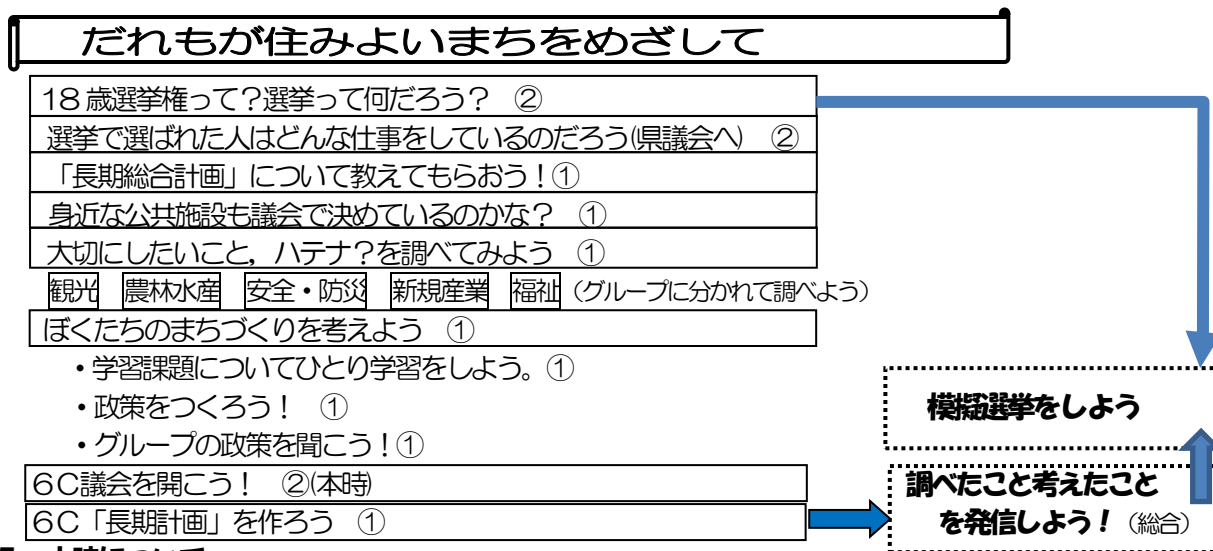
「問い続け、学び続ける子どもたち」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながらさらに深めていくことだと考える。自分の考えを発信することにより、考えを明確にすることができる。そして、友だち相互に刺激し合う中で、自分の考えを修正したり、深化・発展させたりしながら、共通点や相違点を探し、問題の共有化ができる。そういった子どもたちの学びの軌跡である見えるものを手がかりに見えないものにも気づき問うていく姿も学び続ける姿であろう。

サブテーマである「子どもの言葉でつくる授業」とは、子どもがつくる授業であり、資料の観察を通して把握した事実、体験的な活動を通して生まれた気付きから学習問題をつくり、見通しをもって社会的事象を調べていく中で、問題意識が高まっていく学びである。その問題意識の深まりは切実な問いやこだわり、自分なりの考えの根拠を述べる子どもの姿となって表れる。

3. 単元目標

- ・地方公共団体の働きや議会・行政・国の支援・住民の関係や政治の役割、政策決定のプロセスについて、調査したり資料を活用したりして調べ、政治の働きを理解する。(社会認識)
- ・他者の意見等を通じて、政策についての自らの考えをもち、判断を行うことができる(公正な判断力)
- ・一人一人が主権者としての自覚を持ち、進んでまちづくりに参加しようとする態度を身につけることができる。(社会と関わる力)

4. 単元計画(全14時間+総合)



5. 本時について

本時では、5グループの中から出た和歌山県の政策の提案について話し合いたい。

一人一人が自分の考えや願いの根拠を持ち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、自信をもって発言するだろう。子どもたちが問題に対して多様な角度から考え、意見交換する中で、多くの方から得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高めるための練り合いの場になればいいと思っている。

今まさに、まちづくりに関わる方々と出会い交流する中で、和歌山県の現状の厳しさを受け止め、未来のまちづくりに向かって熱心に追究している。そして、そのまちづくりの提案を行政や地域に発信するため、「使命感」に駆られている30人の子どもたち。本気になって「和歌山県の未来のまちづくりに対する思いは誰にも負けない」と話している。その熱意あふれる話し合いを見ていただきたい。